

時空間と虚空

— 文化としての建築創作論 —

前田 哲男

山口県立大学附属地域共生センター

Space-Time and Koku

— Monograph on Architecture as Culture —

Tetsuo MAEDA

YPU Center for Cooperative Community Development

Abstract

Kitaro Nishida created a unique philosophy to reveal the underlying structure of the word. Based on literature from the early stages of Nishida's career, this study is an attempt to create a theory of creative architecture.

It is very important that human rights are respected and we become free. However, free desire when released may run recklessly. Public interest as seen in Nishida's philosophy overcomes the mechanical aspect of everyday life. Furthermore, public interest is considered an avenue to creative production.

By holding the essence of Nishida's philosophy, I consider the aim of architectural design, specifically, one which is in concordance with people's independent and free activity.

Keywords: Value creation, Architecture, Chora, Space-time, Koku, Public interest

キーワード：価値創造、建築、場所、時空間、虚空、公益

1. 序

建物の設計に際しては様々な設計条件が登場する。そしてその建物を利用する関係者が多いほど、相反する設計条件が登場し、複雑な方程式の解を見出す困難さに設計者は悩まされることになる。通常は、様々な設計条件に重みづけをほどこし、優先順位の高い課題から解決を図ることになる。建築設計という行為には、設計者の世界観、さらに建物を建てる目的やそれを実現するための手法が重要になってくる。そして特に、設計者としての姿勢、その背後にある世界観つまり思想・哲学が重要であると考えられる。

人々は、そのおかれた環境によって、多大な影響を被るということを考慮すると、安易な姿勢での建築設計は、人々の自主的で自由な活動を阻害する事態を招くことにつながり、社会に対して許されない行為に陥ってしまう可能性が高いと考えられる。そこで、建物を利用する人間を物や道具といった手段

として取り扱うのではなく、人間を目的とする、人間尊重の建築創作論を構築する必要性があると考えている。

本研究は、現実の世界の根本構造を明らかにすることを通して独自の哲学を創造した西田幾多郎(1870 - 1945)の前半の論文から、建築創作論の一端を構成しようとする試みである。主観と客観との対立を前提に、時間・空間という感性の形式とカテゴリーによる認識の構成作用に注目したカント哲学に対して、西田哲学は東洋思想を背景に登場してきている。なお前半の範囲であるが、小坂国継(1943 -)は西田哲学を「往相の過程」と「還相の過程」とに区分しており、それに基づいて考えている¹⁾。

2. 現象と対象化・モデル化・抽象化

我々は様々な現象を体験し、それを利用している。そして、そうした現象を利用するために、現象を対象化・モデル化して認識し理解している。ここでは

そのありようを、色の理解と表記を通して、初めに検討する。西田の論文においても、しばしば例として色が取り上げられている。

波長が異なると色は異なり、色を波長に対応させて直線状に並べると、赤と紫は両極に離れて位置する。しかし、色を環状に配列した色環では、赤紫を間に挟んで赤と紫は隣に並ぶ。ここで、赤と紫を媒介する赤紫の波長はどうなっているのかが疑問になるが、赤紫は複数の色の混色である。そのために一つの波長で示せないの、赤紫は色の直線に位置づけることができない。つまり、すべての色が登場しように思われる波長の直線には、限られた色しか登場してこない。そこでマンセル表色系では、色相の色環を基に、色相・彩度・明度の三属性による色立体で色を表記するが、波長との関係はそこに表現されていない。

人間の様々な行為のための操作対象として色を取り扱うとき、直線状に並べることも環状に並べることもできる。しかし、そのどちらも色に関するすべての情報を組み込んだものではない。そこで我々は、行為の目的に応じて両者の手法を使い分けている。

しかし、自然科学や工学の対象として色を取り扱うときと、私たちの日常生活における色の具体的な体験は異なっており、そのことが様々な芸術家の創作意欲をかきたててきたという歴史がある。つまり、生活世界の中に登場してくる色、芸術意欲をかきたてられる生きられた色は、こうした抽象化されたモデルに基づく手法では把握し切れないと考えられる。

こうした対象化に基づくモデル化・抽象化は、他にも様々な場面で登場してくる。例えば時間も、過去から現在そして未来に至る1本の直線で表現することができるとともに、12時間を一つの円として表現することもできる。しかしどちらも、生きられた時間を取り扱うときには、過不足のない十分な表現であるとは言えない。

言語においてもこうした抽象化が登場してくる。言葉の定義は、有限の数の言葉で定義されている。そのため、生きられた体験を言葉で表現しようとしたとき、言語表現の限界が登場してくる。言葉とその表現対象は正確には呼応しない。例えばある感情を表現しようとするとき、その微妙な感じやかすかな違いまでも表現しようとしたときに登場する、表現することのできないもどかしさは、誰もが経験していることである。

このように、対象化に基づく現象のモデル化・抽象化には様々な手法があるが、それぞれの手法にはその限界があると考えられる。

3. 対象化と自覚

西田が目にしたように、「意識する意識」を意識することは困難である。眼が眼自身を直接見ることができないように、意識が意識自身を直接意識することはできない。知る者は知る者自身を知ることはできない。意識している意識を対象物として自分が意識した途端に、それは「意識される意識」であり、「意識する意識」ではなくなってしまう。「意識される意識」は「対象化された意識」であり、それは「意識する意識」すなわち「真の自己」そのものではない。

自分が自分を反省する自覚においては、「意識する意識」と「意識される意識」が一つになって登場する。そして、それが分化され2つの意識に区分されたとき、「意識する意識」つまり「主観としての意識」は対象化することのできない「真の自己」であり、反省しつくすことのできない直接の所与である。

ここで、「主観としての意識」は作用（働くもの）であり、「意識される意識」つまり「客観としての意識」は内容（活動の所産）と考えられる。そして自覚では、作用と内容が一つであり、知るものと知られるものが一つである。それは主客の分化がない状態であり、「AはAである」、「自我は自我である」という状態である。西田はフィヒテ（1762 - 1814）の事行に注目したが、この主客の分化がない自意識の出発点が事行である。フィヒテは、「自我は働くものであると同時に活動の所産である。能動的なるものであると同時に能動性によって生み出されたものである。活動（Handlung）とそこから生まれた事（Tat）とは一にして正さに同一である。従って、我は存在すは一つの事行（Tathandlung）を言ひ表はす。」²⁾と語っている。事行とは、作用とその結果が同一である自覚という意識のことを表現している。

ところで「自我は自我である」という判断には、無限の循環が登場してくる。フィヒテはその様子を次のように語っている。

「君の思惟を君が意識する為めには、君は君自身を意識しなければならぬ。—君が—君を意識する、と君は云ふ。それ故君は君の思惟する自我とこの自我の思惟に於て思惟された自我とを必然的に区別する。併し仮りに君がこの事が出来るとすればその為めには、上の思惟に於いて思惟する者が、それが意識の客観であり得る為めに、復してもより高き思惟の客観でなければならぬ。かくして君は、以前には自己を意識してゐる状態に在ったところの一つの新しい主観を、同時に得る。」³⁾

「思惟された自我」には無限の循環が登場しないが、「思惟する自我」の方には無限の循環が登場する。自覚をベクトルで表現すれば、矢印の先の「思

惟された自我」について、その内容は対象化によって把握できるが、矢印の出発点である「思惟する自我」にあえて注目すると、ここに無限の循環が登場する。例えば意識は脳の中に登場してきているが、脳の中に小さな自分を考えると、その小さな自分の脳の中にさらに小さな自分が登場し、これが無限につづき、反省しつづきことができなくなる。意識作用の作用は無限に循環する。また、私が物体や現象を疑うのではなく、私が私の存在を疑うとき、「私が私を疑っている」そのことをさらに疑っている私が登場し、ここにも無限の循環が登場してくる。

なお、この無限の循環について西田は、ロイス(1855 - 1916)の『世界と個人』における「英国に居て完全なる英国の地図を描く」という考察を参照している⁴⁾。

フィヒテはこの無限の循環を嫌い⁵⁾、自我と非我との対立から、「思惟された自我」の方向、矢印の先に注目することでフィヒテの体系を構築している。これに対して、西田はこの無限の循環を積極的に受け入れ、西田独自の体系を構築している。静止した自己は考えられた自己であり、動的な考える自己を問題にするため、つぎのように、この無限なる作用の循環を西田はあえて考察している。

「我々の自我は無限なる作用の統一である。我々の自我の根柢には達することのできない深淵がある。作用の作用の立場は単なる作用の統一に対しては、極限点の位置に立つのである。此立場は、一方から見れば一つの作用として統一することのできない全然非合理的な自由意志の立場である。是故に此立場の対象界として、我々に全然非合理的と考へられる経験事実の世界も成立するのである。此世界は理性の対象界ではなく意志の対象界である。」⁶⁾

上記は、1923年に出版された『芸術と道徳』からの引用である。無限の循環を引き起こす「作用の作用の立場」である「思惟する自我」における自由意志が強調され、西田は意識の出発点である自由意志に注目している。フィヒテの体系は「対象化された意識」に基づくもので、それは「意識する意識」ではない。西田はあくまで無限の循環に陥る「意識する意識」を検討しようとしている。そしてその後、『働くものから見るものへ』という著書で「場所」という概念が登場してくる。

眼自身を直接見るためには鏡が必要になる。眼は鏡において自身を見ることができるよう、意識は「意識のおかれている場所」においてその働きや意識のベクトルを見ることができると考えられる。

この「場所」という論文に対して左右田喜一郎(1881 - 1927)が批判論文を発表し、ここに「西田哲学」という呼称が誕生した。これに対する西田の応答論文が「左右田博士に応う」であり、意識を対

象化するのではなく、高い立場に立つ反省ということがつぎのように重視されている。

「主観的作用を反省し之を知るといふことは、尚何等かの意味に於て之を対象化すると云ひ得るかも知れない。反省的知識の対象として之を認識することも云ひ得るであろう。併し批評哲学の知識といふ如きものに至つては、更に一層高い立場に立つものと考へざるを得ない。同一の立場に立つ知識を以て、同一の立場に立つ知識を反省し批判することはできない。」⁷⁾

「私は私だ」という言い方では「真の自己」がつかみきれない。「主観としての意識」は確かに基体(実体)であるが、日々、時々刻々と変化する。「客観としての意識」は活動から生まれた所産であり把握しやすいが、それは「真の自己」ではない。そこで西田は、「私は、私において私だ」と考える「場所」の論理を提言している。そして意識の鏡である場所は、深く大なるものへと推し進めて行く事ができ、これが真の意味での反省、批判哲学の知識であると主張している。

この高い立場に立つ反省は、自身の境涯を高めて公益を追求することや人間精神の革新につながり、反省することによって「意識する意識」つまり「真の自己」の浄化や開発を目指す行為であると考えられる。日常生活における様々な行為には様々な欲望が登場してくる。こうした欲望の浄化や健全化に基づく公益の追求は、良き生の探求のために、我々の道徳的意識の向上につながるものである。

西田は芸術と道徳との関係について「私は芸術は道徳を予想して成立すると思ふ、道徳的發展を予想して芸術的想像があるとき考へるのである。総ての根柢は唯、一生命あるのみである、一つの自由我があるだけである。真摯なる生命の要求の上に立たない芸術は単なる遊戯でなければ、技巧にすぎない」と語っている⁸⁾。

遊戯や技巧に落ちない芸術は、道徳的發展を引き起こすものである。そのためにも意識の対象化によっては捉えることのできない自由意志について、その浄化と開発が重要であると考えられる。

4. 場所、空間、虚空

西田における場所は、空間的・地理的な意味での場所のことではない。時間と一体となった、時空が分化されていない、我々が現に具体的に体験しているその時、その場のことである。すべての存在する心や物は時においてあるとも考えられる。

場所には作用と内容が一つになったベクトルとしての志向性をもった意識が登場する。そして時空未分の動的な現在という場を深めていったもの、さらに一層高い立場が、相対的ではない絶対的無の場所

である。絶対的無の場所において、知・情・意などの様々な意識を見ることができると考えられている。そして絶対的無の場所は、東洋思想に登場する概念的限定を受けない「虚空」を意識していると考えられる。

2世紀に生まれたインドの龍樹（ナーガールジュナ）はその主著『中論』において「空の思想」を語っているが、「虚空」について、「虚空は有（もの）でもなく、非有（無）でもなく、特質づけられるものでもなく、また特質でもない」と語っている⁹⁾。このように「虚空」は、有無の対立を超えた絶対的無の場所といえる。

ところで操作対象としての空間は、3次元の幾何学的空間として登場する。ルネ・デカルト（1596 - 1650）において登場してきた解析幾何学は、図形や空間を代数的に操作することを可能としている。そして、アインシュタイン（1879 - 1955）の相対性理論では、時間が直線で表現され、時間軸と空間軸を合わせた四次元の時空間が登場してきている。

物体の運動を表現する客観的時間は直線で表現され、対象認識の論理を構成し、「客観としての意識」つまり「対象としての自己」を問題にする自己認識と関係してくる。

しかし、時間を直線で表現するとエレア派のゼノンのパラドクスが登場する。アキレスが亀に追いつくことができないという無限小に関するパラドクスはよく知られている。

また、現在を点で表現することは、多様な意味を持つ豊饒な生きられた現在を抽象化することにつながる。生きられた時間においては現在が重要な意味を持つ。我々は現在において過去を想起し、未来を予想する。つまり、過去は単なる過去ではなく現在における過去であり、未来も現在における未来である。時間を直線で表現したり、現在を点で表現することは、対象化やモデル化のひとつの手法でしかないと考えられる。

東洋思想では、時間も空間もともに絶対的な無の状態とその無限が意識され、概念的に限定されず、「虚空」と呼ばれてきた。

1932年に戸坂潤らとともに唯物論研究会の創設に参加した三枝博音（1892 - 1963）は、『日本の唯物論者』で唯物論的視点から、貝原益軒や戸坂潤など、日本の思想家の思想を検討しているが、その序論でつぎのように語っている。

「東洋では「自然」とか「物理」とかのことはあったけれど、その内容は空疎でしかなかった。空疎というのは、そういう概念（すなわち「自然」や「物理」の概念）をふたたび自然のじっさいの世界に戻して、そこでもう一度、検討することがぜんぜんで

きないという意味である。このことは人間たちの日常の生産の生活と、ああした考え（概念）とにれんかんがなかったことでもあるのである。虚空の考えはあっても、「空間」の概念はできてこない。」¹⁰⁾

三枝の言うように、東洋思想では自然科学や工学で利用される空間概念が発達してこなかったのは事実であろう。そこで東洋思想は非科学的であると言われるが、この、内容が空疎と言われる空間・時間の無限を意識する「虚空」の論理の持つ独自さが、日本的な建築の独自さでもあるとも考えられる。さらに、西洋的な時空間を対象化し操作する方法では、「虚空」を取り扱うことはできないと考えられる。日本の伝統を創作の出発点にするならば、この「虚空」を避けて通ることは考えられない。

日本の伝統から建築創作活動を開始した篠原一男（1925 - 2006）は、先に引用した三枝の文章の後に、「空の論理」について、「古代末期の幽玄・ものあわれも、これの日本の変形に過ぎない。中世的なわび・さびも、またこの思想と同じ土壌の上にある」と語っている¹¹⁾。しかし、「虚空」と「幽玄・ものあわれ・わび・さび」を同列に扱うことには疑問が残る。確かに「虚空」からの派生ではあるが、派生でしかない。「無」や「虚空」は「幽玄・ものあわれ・わび・さび」さらに厭世観という情感に結びつきやすいが、西田は厭世観という情感に結びつけて絶対的な無の場所を考えていたわけではない。

ところで、篠原は「わび・さび」という情感に対して、金閣の金箔の輝きにも注目している¹²⁾。「わび・さび」という情感には縁遠い金閣も日本的なものである。日本において、金箔に代表される太陽のように光輝く現象に対する関心が強かったのも歴史的事実である。

太陽光をプリズムにあてると虹の色が登場するが、唯物論的西洋的自然科学は色を対象化し、色立体として自然科学的に表現し利用している。それに対して、無限の種類の色がおかれている場所は、概念的限定を受けつけず、絶対的無の場所である。太陽光の色を赤・青・黄などの色名で表現することはできない。現実の世界の根本構造として、絶対的無の場所を重視する東洋的な思考方法の可能性を探ることは、生きられた世界を問題にすることであり、創造者の琴線にふれることにつながると考えられる。

5. 非連続の連続としての時間

我々の心は、知・情・意、あるいは感性・知性・理性などと分類され、そこには記憶・想像・判断などの様々な作用（働き）が登場する。そして、自覚に登場するのは、「主観としての意識」も「客観としての意識」もない未分化の意識である。ここで、

自覚をベクトルで表現し始点と終点を分離すれば、「意識する意識」は始点として表現される。

我々の意識は、すべて、過去の原因に基づく因果関係や、未来の目的に基づく合目的性による必然として登場するわけではない。また、まったくの偶然であるとも言えない。意識の始まりは、必然の場合もあれば偶然の場合もある。

ところで、我々に自由意志があることは疑うことのできない事実である。そこで意識の始まりである始点を特徴づける意識は、自由意志であると考えられる。

この意識の始点は、無からの始点であり、瞬間からの始点である。この始まりとしての、空間としての点や、時間としての点が重要な意味を持つと考えられる。

「意識する意識」には無限の循環による無限大の世界が登場するが、同時に、無から有が生まれるという無限小の世界も登場してくる。

善悪や価値・無価値という対立を超え、有無の対立を超えた有無の成立する場所が真の無の場所、絶対的無の場所となる。この真の無の場所は、変化の場所ではなく、生滅の場所であり、瞬間ごとに生滅がくり返される。「真の場所に於いては或物がその反対に移り行くのみならず、その矛盾に移り行くことが可能でなければならぬ、類概念の外に出ることが可能でなければならぬ。真の場所は単に変化の場所ではなくして生滅の場所である」と西田は語っている¹³⁾。

我々は現象の生滅を時間軸を用いて認識している。時間を直線で表現することは、ベルグソン(1859 - 1941) がすでに主張しているように時間の空間化であり、時間の本質を捉えきれてはいない。しかし時間は、ベルグソンの言う流れや持続でもない。西田はつぎのように時間を非連続の連続として捉えている。

「時は現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。而して現在が現在自身を限定するといふことから時が限定せられるといふことは、時は永遠の今の自己限定として考へられると云ふことを意味してゐなければならぬ。時は永遠の今の自己限定として到る所に消え、到る所に生まれるのである。故に時は各の瞬間に於て永遠の今に接するのである。時は一瞬一瞬に消え、一瞬一瞬に生まれると云つてよい。非連続の連続として時といふものが考へられるのである。」¹⁴⁾

時間・空間を感性の先天的な形式としたカント哲学に対して、時間・空間を意識する我々の心における循環・無限大・無限小の世界を的確に捉えることが、現実の世界の根本構造を明らかにすることになると、西田は考えていると思われる。

6. 要素と全体

我々が様々な現象を体験しそれを認識するとき、要素がカテゴリーによって分類されて単語が登場し、単語が組み合わされて文章が登場するように、要素が組み合わされて全体が構成されると考えられる。数学や物理学などの自然科学の体系はこうした要素によるレンガ造のような構築物である。

一方西田のように、全体がまず与えられ、そしてそれが分化発展して要素が意識に登場してくる、あるいは、地から図が分化しそれが意識されるとも考えられる。この場合、全体や地とはいったいなんだろうか？空間においても時間においても無限の世界が想定される。時間においては過去に無限であるとともに、未来にも無限である。この無限の世界、永遠なるものから「いま」と「ここ」が切り出されると考えることができる。

建築設計において、周辺環境のあり様から登場してくる敷地条件をどのように考えるかは重要である。周辺の建物を含めた連続立面を作成することは少ないが、周辺環境との関連を考えたとき、その周辺環境の範囲やその捉え方によって様々な設計案が登場してくる。過去との関係においても、歴史的事実をどこまでさかのぼるかに応じて、設計案が異なってくる。また未来との関係においても、建物の寿命をどのように設定するかに応じて設計案が異なってくる。

所要室と要求面積に基づいて、パズルを解くように、各室の配置を考え、各室を連結して行くのではなく、全体を設定し、分節していく設計手法がある。周辺環境から建物全体が分節され、建物全体から各室が分節されていく。

なお、篠原一男は西洋と日本の平面計画に関して「連結と分割」¹⁵⁾ という区分をしたが、日本の伝統を考えたとき分割ではなく分節のほうがよりふさわしいと考えている。様々な概念の二項対立に対して、一即多や内即外など、A即Bという表現が、西田の論文をはじめ東洋思想にしばしば登場してくる。この2つであって一つであるという思考方法は、2者を分割し対立させるのではない。両者の関連を認めつつ区別することで、切断することではない。様々な概念の包摂関係を見たとき、あるレベルで対立する2つの概念も、それより上位のレベルでは同一の場所におかれていると考えられる。

また、「虚空」を語った龍樹の『中論』においては、「縁起」という考え方が初めから登場してきている¹⁶⁾。この「縁起」とは相互依存関係という意味であり、¹⁷⁾ 相互依存関係の重視は東洋思想のひとつの特色であると考えられる。

分節の典型例は、古代の寝殿造に見られる母屋と

庇の構成に見ることができる。巨大なスパンを実現することができないという技術的な制約から登場してきた構成である。しかし、間面記法という言語表現が登場してきた背景として、全体を分節する、自然から母屋を分節し、さらに必要に応じて庇という場所を分節するという、分節の意識が基本にあったと考えられる。

また古代の寺院においては回廊によって寺院の場所が分節される。ところで、法隆寺の伽藍配置では左右対称がくずされているが、左右対称という形式より、金堂と五重塔の場所の平等性が重視されていると考えられる。ここでは、金堂と五重塔と、相反するものから美しき調和が生まれている。

連結の手法以上に分節の手法においては、その境界のあり方に様々な手法が登場する。単に壁によって空間を分割するのではない。2つの空間の境界の作り方は、閉鎖的なものから開放的なものまで多様な姿が考えられる。日本の伝統的な建築を見ると、部屋と部屋との境界に襖などの可動間仕切りという手法が登場し、内外の境界には縁側や庇といった半屋外空間が登場している。2つの空間の関連を認めつつ区分するという分節の手法は、連結の手法と対立し、日本的なるものの特徴の一つである。

7. 結論

客観と主観とを分離し、無限を避けるか、または無限を対象化し手なづける発想は、モデル的・抽象的な思考とともに、自然科学や工学を豊かに発展させてきており、今後の発展も期待されている。

それに対して、西田の自由意志・自覚・場所の論理は、的確に捉えることのできない無限大や生滅の場である無限小を重視するところから登場してきていると考えられる。絶対的無の場所や虚空、さらに生滅の瞬間を見ずに工学的知識を利用するのと、それらとともに公益を意識し、現実の世界で活動を展開していくのとは、得られる成果が大きく異なってくると考えられる。

自覚における反省において、絶対的無の場所や虚空、さらに生滅の瞬間を見ることは、自身の境涯を高める高い立場の反省とともに、道徳的意識の向上や心を深く耕す文化的な活動につながり、公益を求めるものである。しかし、具体的な創作活動にすぐには結びつかないと考えられる。連結の手法に対して、高い道徳的意識に基づく、分節の手法の有効性が見えてきつつある。しかし、それが建物を設計するときのすべての手法を統合するものであるとはいきれない。

小坂国継は西田の後半の仕事を「還相の過程」と捉えているが、現実の世界での創作活動が、まさにこの還相の過程として登場したとき、新たな価値の

創造が実現されると考えられる。これが今後の検討課題である。

註

- 1) 小坂国継：西田幾多郎の思想、講談社、東京（2002）、p.183
- 2) フィヒテ、木村素衛訳：全知識学の基礎上巻、岩波書店、東京（1949）、p.110
- 3) フィヒテ：前掲書、p.76
- 4) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第二巻、岩波書店、東京（2004）、p.14
- 5) フィヒテ：前掲書、p.77
- 6) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第三巻、岩波書店、東京（2003）、p.48
- 7) 西田幾多郎：前掲書、pp.479-480
- 8) 西田幾多郎：前掲書、p.57
- 9) 中村元：龍樹、講談社、東京（2002）、p.333
- 10) 三枝博音：日本の唯物論者、英宝社、東京（1956）、pp.37-38
- 11) 篠原一男：住宅論、鹿島出版会（1970）、p.35
- 12) 篠原一男：前掲書、p.11
- 13) 西田幾多郎：前掲書、p.423
- 14) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第五巻、岩波書店、東京（2002）、pp.267-268
- 15) 篠原一男：前掲書、p.56
- 16) 中村元：前掲書、p.320
- 17) 中村元：前掲書、p.182